

自閉症児と関与者の相互的対人行動について

石倉 健二・眞保 眞人・高橋 信幸

要 旨

自閉症児とのコミュニケーションを豊かにとることを目的に、遊びを通じたアプローチが多く行なわれている。本研究においては、関与者が自閉症児とどのような関わり方をする中で、関係を持てるようになるのかについて、初心者と熟練者を比較して検討を行なった。その結果、熟練者としては「単独行動」の時間が短くなり、児から関与者に対しての「接触行動」や「受容行動」が多く、関与者からの働きかけに対しての行動の総数が熟練者の場合では多くなることが明らかになった。こうしたことから、熟練者は 児に対して様々な働きかけを行い、関与者から関わり的手段を積極的に探っている、 児が働きかけてくる遊びには積極的に乗っていく、 児からの働きかけには受容的に応答していく、ことが熟練者の特徴として示された。そして、子どもの行動の変化をもたらすためには、関与者自身の子どもの行動に対する応答の変化が重要であることが考察された。

キーワード

自閉症児、対人行動、遊び

問題と目的

DSM-Ⅳによれば、自閉症の診断基準として、対人的相互反応における質的障害、意志伝達の質的障害、行動、興味および活動の明らかな制約、反復的で常同的な儀式的存在、が挙げられている。この症候群の中核的部分については、原因論も含めて様々な議論がなされてきている。別府（2001）はその原因論の変遷について、Kannerによる自閉症概念の提出、言語・認知障害説、Kannerへの回帰、の3期に分類した上で、社会性障害が言語・認知障害から必然的に発生しないことや、社会情緒的手がかりの処理が必要な行動に自閉症特有の問題が見られること、更には認知障害がかなり改善されても、その社会性障害は残存することなどを根拠に、社会性障害を一次的障害ととらえる立場が、1980年代以降には主流になっていることを示している。そして更に、そうした社会性障害を、他者と関わりたくないというよ

うな動機的側面や力動的把握ではなく、他者の心的世界や社会的状況の認知が困難であるがゆえに、他者と関われない、不適切な行動をとる、と仮説した上でのアプローチが必要であると述べている。

こうした立場も反映しながら、自閉症児とのコミュニケーションを豊かにとることを目的としたアプローチが、遊びを通して行われることも多い。浦崎（2000）は、トランポリンを使った感覚的刺激から始まり、描画による遊びの共有を通じ、さらに身体を使ったやり取り遊びや情動の共有まで可能になったケースを報告している。また伊藤（2002）も、揺さぶり遊びやすぐり遊びなど、快の情動を子どもと大人が共有、交流する「情動的交流遊び」によって、コミュニケーション行動が発達した事例を紹介している。このように、遊びを通じて自閉症児の社会性の障害にアプローチし、他者との相互関係や自分の気持ちの表現、他者の気持ちの理解

の促進を図っていこうとする取り組みが行われている。

しかし、自閉症の障害の中核が社会性の障害、換言すれば「人とうまく関係を持ってない」ことであるために、関与者が何とか子どもと関係を作ろうと努力しても、その努力はむなしく、一緒に何かをして遊ぶといったことが成立しないまま時間が流れていってしまう、ということが発生する。自閉症児との臨床において、筆者自身このような体験をすることは多い。「人とうまく関係を持ってない」ことを主訴とするケースの場合、遊びを通じて「関係を持てる」ようにしていくことが臨床的関わりの最初の目標となる。では、遊びの中で具体的にどのような関わり方をすることが、「関係を持てる」ようになるために必要であるかを検討することは、特に、自閉症児への関わりの初心者にとっては重要な問題である。

そこで本研究においては、ある自閉症児との遊び場面で、関与者と子どもが「関係を持って」遊ぶための関与者の関わり方や態度について検討を行う。その際、自閉症児との関わりの経験の少ない初心者と熟練者の行動を比較することで、両者の違いを明らかにし、「関係を持って」遊ぶために関与者が行うべきことについて考察を行うものである。

調査方法

1. 調査対象

N大学内で月1回実施されている自閉症児デイサービス（以下「Dクラブ（仮称）」）に参加するA児（7歳男児）との遊びや支援を担当する担当者B氏（自閉症児との関わり経験の少ない初心者。21歳女子学生）とC氏（自閉症児との関わり経験の豊かな熟練者。29歳男性大学教員）。

なおDクラブは、N大学内で毎月第4日曜日に、地元の自閉症協会のメンバーと共同で2002年11月から実施されているデイサービスグループである。本調査を行った2003年度では、30家

族33名の自閉症児と17名のきょうだい児が参加の登録を行い、毎回15～20名前後の自閉症児が参加をする。スタッフはN大学を中心として、市内の短大や高専、看護学校の学生及び近隣の福祉施設職員ら約70名が登録を行っている。内容は、10時30分の自由遊びから始まり、約60分のグループワーク、60分の昼食と自由遊びをばさんで、午後のグループワークを約60分実施した後、保護者との情報交換を行なうもので、約4時間のプログラムで構成されている。参加する自閉症児一人に対し、その子どもの参加時間内の全てのコミュニケーションや行動に寄り添い、状況に応じてグループワークへの参加を促す担当者が一人つくことになっている。またきょうだい児にも、安全に配慮した別グループを構成している。

2. 調査期間と調査場面

2003年の9月と10月のDクラブ実施場面で調査を行なった。プログラムはいずれも、公園内での遊具を使った自由遊びである。両場面とも、公園内の砂場が主な調査場面となった。なお、9月の担当者がB氏、10月の担当者がC氏である。

3. 記録と分析

A児とB氏あるいはC氏が遊んでいる場面をそれぞれ1台のビデオカメラにて録画する。録画した画面内に、A児と担当者の両者がいずれも書き続けている任意の10分間を分析対象時間とした。その10分間のA児と担当者の行動について自由記述式に記録した後、得られた全行動を宍戸ら（1995）の行動分析基準（表1、表2）を元に分類し、数量的処理を行なった。この行動分析基準は、人との関わりの行動を「子どもから他者への働きかけ行動」と「他者から子どもへの働きかけに対する行動」に二分し、それぞれの構造と質的深まりについて検討することが可能である。

表1 関与者への働きかけの行動

行動型	下位行動型	行 動 内 容
孤立	孤立行動	何もせずぼんやりしている。ぼんやりと窓の外を見ている
		特有な表情・動作を示す(指しゃぶり、チック的動作)
	単独行動	ぶらぶらしている
		一人遊びをしている(読後が伴うものも含む)
傍観	傍観行動	周囲の人や出来事を見回す、ぼんやり見ている
	注目行動	周囲に人や出来事に注視・注目する
接近	並列行動	他者のそばに行って一人遊びをする
		並行遊びをしている: 他者の傍で同じ形態の遊びを行っている場合で、相互作用が判断と認められない場合
		一つのもの順番を待って用いる(滑り台の順番を待ってすべる)
	接近行動	他者に近寄る、あるいはその周囲をうろつく
相手の興味を引くかのように振舞う		
接触	同調行動	同調・模倣する
		他者の行動やその場の状況に合わせた行動をとる
		他者のやり始めた行動を見て、同じ行動をする
		その場の雰囲気酔う
		他者に着いていく
	接触行動1	相手の表情: 笑いかける、イーをするなど
		提示: 物に向けた、ぶつける、見せるなど
		自己顕示: 他者の注目を引くために大きな声を出したりする
	接触行動2	他者と直接かかわりをもつが、持続的相互作用までは発展しない行動
		手招きする、言葉をかける、慰める
		物を渡す、配る、奪う、分け与える
		相手の身体・持ち物に触れる、押す、ひっぱる、しがみつく、抱く、けとばす、手をつなぐ、つつくなど
		相手の遊びを邪魔する、非難する、悪口を言う、告げ口をする
		許可・承認を求める、質問する、事情を訴える、説明する、注意する

結 果

1. 全般的特徴

まずA児からB氏への行動についてみると(表3、図1)、「孤立」内の単独行動が22回(37.3%)を占めている。続いて「接触」内の接触行動2が12回(20.3%)を占めている。次に「傍観」内の注目行動が11回(18.6%)と3番目に来ている。その他は0~4回以内に収

まっているこの結果を見るとA児の行動は「孤立」が半分近くを占めていることが解る。

またA児からC氏への行動を見ると(表3、図1)、「接触」内の接触行動1が41回(48.8%)と圧倒的に多く、続いて「孤立」内の単独行動が28回(33.3%)、「接触」内の接触行動2が9回(10.7%)となっている。それ以外は1回(1.2%)から5回(6.0%)に収まって

表2 関与者からの働きかけに対する行動

行動型	下位行動型	行 動 内 容
受 容	受容行動	受容的応答（受容的表情・表現）
		相手の要求に好意的に応じる、受け入れる、指示に従う
		他者からの援助を行為的に受ける
		働きかけに対して喜びの表情・表現をする
	従属行動	質問に率直に答える（肯定否定の表情表現を含む）
		譲歩・従属 成り行きに任せる、なすがままにされる
中性的 反 応	傍観行動1	傍観・注目・注視 注意を向ける
		無理解・無関心 具体的応答反応が判然としない
	傍観行動2	拒否的傍観・注目・注視 拒否的に注意を向ける
		拒 否
	回避行動	
	回避行動	
回避行動		
拒 否	拒否行動	拒否的応答（拒否的表情・表現）
		ふくれっ面をする、泣きわめく、不平をいう
		抵抗・排斥
		嫌だと答える、払いのける、追い払う

いる。

次にB氏からA児への働きかけに対する行動をみると（表4、図2）まず総数が19回と少なく、その中でも「拒否」の拒否行動が6回（31.6%）、回避行動が4回（21.1%）と圧倒的に多くなっている。

またC氏からの働きかけに対するA児の行動をみると（表4、図2）C氏に対しては総数が63回でB氏の場合に比べて圧倒的に多く、内容的にも「受容」の受容的行動が25回（39.7%）、「中性的行動」の無反応が20回（31.7%）となっている。

2. B氏とC氏との比較

担当者への働きかけの行動においては、総計

がB氏の場合は59回、C氏の場合は84回と、A児からC氏に対する働きかけが多く見られた（表3、図1）。下位行動別に見ると、「単独行動」はB氏とC氏であまり差は見られないが、「注目行動」がB氏にやや多く、B氏との場合はC氏との場合に比べじっと周りを見ていることがやや多いことがわかる。そして最も差が現れているのは「接触」である。「接触行動1」についてC氏が圧倒的に多く、41回（48.8%）である。「接触行動2」については、B氏の方が割合的にはやや多く12回（20.3%）であるが、絶対数としてはC氏の9回（10.7%）とさほど変らない。ここで見られる接触行動1は主に、A児から担当者に砂をかける行動となっている。接触行動2は、相手の身体を押ししたり触れ

表3 A児から担当者への働きかけの行動

行動型	下位行動型	B氏 (9月)	C氏 (10月)
孤立	孤立行動	4 (6.8)	1 (1.2)
	単独行動	22 (37.3)	28 (33.3)
小計		26 (44.1)	29 (34.5)
傍観	傍観行動	3 (5.1)	5 (6.0)
	注目行動	11 (18.6)	5 (6.0)
小計		14 (23.7)	10 (12.0)
接近	並列行動	0 (0.0)	1 (1.2)
	接近行動	3 (5.1)	1 (1.2)
小計		3 (5.1)	2 (2.4)
接触	同調行動	3 (5.1)	1 (1.2)
	接触行動1	1 (1.7)	41 (48.8)
	接触行動2	12 (20.3)	9 (10.7)
小計		16 (27.1)	51 (59.5)
総計		59 (100.0)	84 (100.0)

数値は回数 () 内は比率

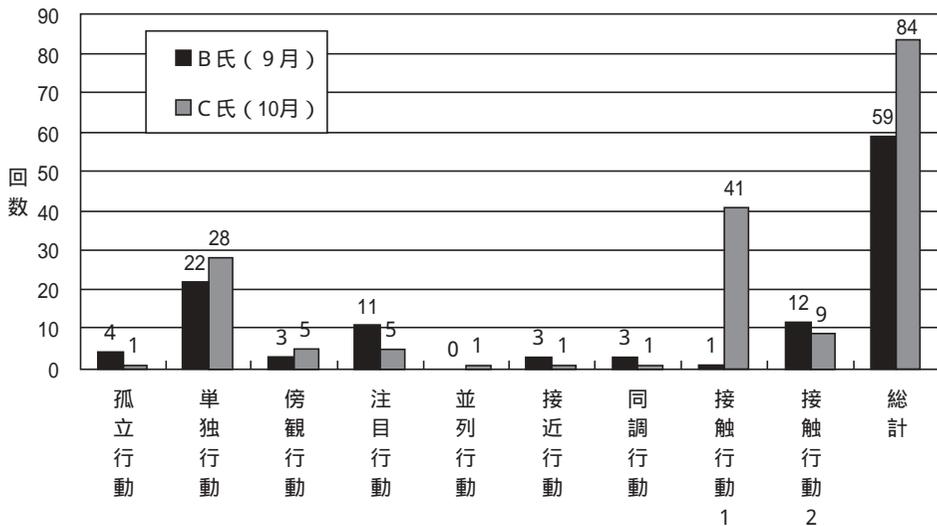


図1 関与者への働きかけの行動

る行動が主である。これはA児がC氏に対しては砂をかけることを多く行っていたことを示しており、B氏に対しては押したりする行動が多かったことを示している。

担当者から働きかけたことに対するA児の行動としては(表4、図2) B氏に比べC氏の

方が「受容行動」と「無反応」が圧倒的に多い。「拒否行動」については、C氏よりもB氏のがやや多い。そして何よりもその総数において、C氏がB氏を圧倒的に上回っている。このことは、A児がC氏に対してはより多くの行動を行っていることを示しており、このことは、C

表4 関与者からの働きかけに対するA児の行動

行動型	下位行動型	B氏 (9月)	C氏 (10月)
受容	受容行動	3 (15.8)	25 (39.7)
	従属行動	0 (0.0)	4 (6.3)
小計		3 (15.8)	29 (46.0)
中性的 反応	傍観行動1	1 (5.3)	6 (9.5)
	無反応	2 (10.5)	20 (31.7)
	傍観行動2	3 (15.8)	0 (0.0)
小計		6 (31.6)	26 (41.3)
拒否	回避行動	4 (21.1)	5 (7.9)
	拒否行動	6 (31.6)	3 (4.8)
小計		10 (52.7)	8 (12.7)
総計		19 (100.0)	63 (100.0)

数値は回数()内は比率

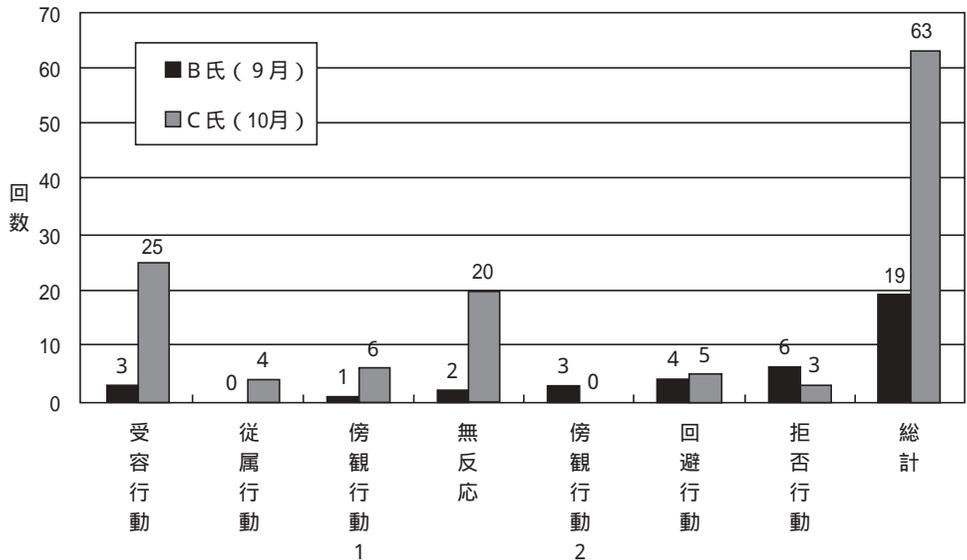


図2 関与者からの働きかけに対するA児の行動

氏がA児に対して積極的に色々働きかけ、A児からは「無反応」な応答も多いが、「受容行動」も多いことがわかる。それに対しB氏は働きかけも少ないために、A児からの応答も少なくなっていることがうかがえる。

考察

1. 「単独行動」にみられる特徴

B氏の場合もC氏の場合も、A児が一人遊び

をしている場面は多く見られた。C氏のほうが28回とやや多いが、これは一回あたりの時間の長さに違いがある。B氏の場合は、A児を見ている時間が長く、その結果、児が一人遊びをしている時間が長くなり、単独行動の分析上の回数はやや少なくなっている。一方C氏は、関わろうと色々な事を投げかけており、遊びが断続的に中断するために回数的にはB氏の場合よりも多くなっている。こうしたことから、今後は

回数だけでなく、時間的な分析も行う必要がある。

2. 「接触行動1」と「受容行動」にみられる特徴

「接触行動1」においてB氏が1回に対して、C氏は41回と顕著な差が出ている。

これにA児の遊びの特性がよく現れている。両方のいずれの場合も、撮影は砂場遊び場面であった。そのためA児がC氏に砂をかけている場面が多く見られた。そして、砂をかけられながらC氏はそれを嫌がることなく、むしろ楽しみながら、またA児に同じように砂をかけたりしていた。そうしている時にA児はいつも笑顔であった。それに対してB氏との場面では、児がB氏の足に砂をかける場面が何度か見うけられたが、B氏は「ダメダメ」と言うばかりであった。また、その他の場面でもA児の働きかけに対して応答していなかったし、気付いていないようにも見受けられた。

「受容行動」ではB氏が3回とC氏が25回と顕著な差がある。接触行動1と同様にA児がC氏に砂をかけることが多かった。それに反応したC氏はA児にまた砂をかけ返しているところが多く見られた。そしてA児は、それを嫌がらずにまた砂をかける。このC氏に砂をかけたり、かけられたりする場面が多かったので、このA児の「接触行動1」と「受容行動」が連動して大きな差が出た。

3. 「無反応」にみられる特徴

B氏に対してが2回とC氏に対してが20回と顕著な差が出ている。B氏が働きかけてもそれにA児が反応を示してこないことを示している。この無反応の差の原因であるが、B氏はA児に働きかけはするものの、A児が無反応であった時にそこで働きかけが終わってしまっている場面が多くみられた。それに対しC氏は、A児が無反応であった時にそこで終わらずに別の違うことを働きかけている場面が多く見てと

れた。つまり、C氏は子どもに関わり続けようとして、A児に次々と色々な働きかけをしている。そのため、働きかけが多い分、A児の無反応の回数が増えていると考えられる。

4. 「傍観行動2」と「拒否行動」にみられる特徴

「傍観行動2」ではB氏が3回でC氏が0回と児の行動に差が生じている。これは先に挙げたようにB氏の場面では児に「ダメダメ」と言うことが多く、A児もB氏を拒否的に見ることがあったと考える。それに対し、C氏はA児がほとんど笑顔であったところからもわかるように、A児が働きかけたら必ず何らかの応答している。そのことからC氏が働きかけても、そのことによってA児がC氏を拒否的に見ることがなかったといえる。

5. 関与者からの働きかけに対する応答の総計にみられる特徴

B氏が19回とC氏が63回と特徴が見られた。これは担当者が働きかけたときのA児の応答の数なので、回数を見た場合には、担当者がA児にどれだけ働きかけたかが反映される。すると、数値だけで言うとC氏はA児への働きかけがB氏に比べて圧倒的に多いことがわかる。単純に計算すると、B氏は30秒に一回、C氏は10秒に一回のペースで働きかけていることになる。

これを反映しているのが一人遊び（単独行動）での回数と時間の長さと考えられる。B氏の方は単独行動の回数はC氏よりわずかに少ないものの、時間はC氏よりも長くなっている。同様に、C氏の方では回数はB氏より多いものの、時間が短く、多くの働きかけによってA児の行動が細切れにされ、児が一人になる時間を作らないようにしている。これは自閉症児に関わる時の、担当者の考え方の違いが反映されているのではないだろうか。つまり子どもと関わりを持とうとする場合に、「次に何をしよう

か」などではなく、「次はこれを試してみよう、何が好きなのかな？」といった考え方を持って、より多く働きかけることが、関与者に対する子どもの応答を増やすことにつながると言える。

まとめ

今回の結果から、次のことがまとめとして言える。すなわち、児に対して様々な働きかけを行ない、関与者から関わり的手段を積極的に探っていく、児が働きかけてくる遊びや物事には積極的に乗っていく、児からの働きかけには受容的に応答していく。

しかし今回の調査は、B氏とC氏という二人だけを対象とした記録と分析を行なった。客観的に見ていて、B氏よりはC氏の方がA児はより楽しく遊ぶことはできていた。ただ、今回の分析から明らかになったC氏の働きかけの方法が全ての自閉症児との関わりで有効かどうかはわからない。

発達障害児を対象とした臨床において、筆者も常に迷う立場がある。田中(1999)も指摘しているが、例えば、砂をコップに入れては高い所からさらさらと落とし、それを眺める、という行動を繰り返す児との関わりにおいて、その砂遊びとは別の行動に積極的に誘うなどの介入的な関わりをするのか、落ちていく砂を楽しむ世界に入り込むのか、ということである。つまり、「働きかけるのか、待つのか」と言うことができる。この時に、両者をタイミングよく使い分けることが必要であると考えている。「待つ」ことは、ある意味で種々の問題の解決を子ども自身に委ねるものである。子どもの持つ発達の可能性を考えると、それはそれで重要な意味を持っていることは了解できるが、「人とうまく関係を持てない」ことを主訴とする発達障害児に、「人とうまく関係を持てる」ようになることを子どもの個体的能力に委ねるのは無理がある。まずは、その子どもが得意とする配列や形を尊重してそれに付き合うことから、関

与者への信頼や依存を生み出すことは出発点であると考え。それが、最初は表面的なやり取りであっても、子ども個人の内部に閉じてしまいがちになる世界を、開かれた関係にしていくことの第一歩であると思われる。そうした点において綿巻(1997)は、関わり手ではなく物としてのオモチャに関心が向けられるような原初的な協働遊びも、子どもとの関わりを深めていくことに、大きな手がかりを与えてくれることを示している。そして、その原初的な協働遊びから徐々に、対人的な遊びに展開させていくところに、関与者の工夫と力量が求められる。

さらに、子どもが変わる背景には、子どもだけが変わったというよりも、関与者が子どもにうまくあわせられるようになったとか、様々な文脈から子どもの表現の意味をとらえられるようになったという、関与者側の変化があることが考えられる(鯨岡1998)。すなわち、関与者側の変化や、そこからもたらされる関係性の変化こそが、子どもに変化をもたらす大きな力となる。

本研究においては、子どもの行動を分析しながらも、問題にしたのは関与者の行動であった。子どもの変化をもたらすためには、なにより関与者の態度や行動が変わる必要があり、本調査を行なったDクラブがこうした関与者の変化をもたらすための機会となることを期待している。

付記

本研究は、2003年度長崎国際大学人間社会学部社会福祉学科共同研究費によって行なわれたものであります。本研究のデータ収集と分析に、多大な協力をいただきました小杉崇文氏(現・介護老人保健施設ききょうの里)に感謝申し上げます。また、本研究が実施できたことに対して、関係各位に感謝申し上げます。

文献

- 1) 別府 哲(2001): 自閉症幼児の他者理解. ナ

カニシヤ出版

- 2) 浦崎 武(2000): 自閉症児における「能動受動」のやりとりの発達の変容 遊びを通した関係性の成立に焦点を当てて . 特殊教育学研究, 37(5), 17-26 .
- 3) 伊藤良子(2002): 自閉症児の遊びとコミュニケーション . 発達, 92, 23-29 .
- 4) 穴戸栄美(1995): 環境との関わりで学ぶこと . 村井潤一編著, 障害児臨床と発達研究 . コレール社
- 5) 田中真理(1999): 「関係性」からとらえた障害児・者研究の動向 . 教育心理学年報, 38, 130-141 .
- 6) 綿巻 徹(1997): 遊びの時間割 自閉症の子どもの遊び . 麻生 武・綿巻 徹編, 遊びという謎 . ミネルヴァ書房 .
- 7) 鯨岡 峻(1998): 関係が変わるとき . 秦野悦子・やまだようこ編, コミュニケーションという謎 . ミネルヴァ書房 .